# 家族でAIを使って学ぶ：本書の解説

AI（人工知能）を使うと、整った文章や答えがすぐに出てくることがあります。しかし、学習の中心に置きたいのは、出力の見栄えではありません。AIの利用を終えたあとも、お子さんが自分で考え、説明し、新しい課題に取り組めるかどうかです。

この章の流れは、どの年齢にも同じ形で当てはめる方法ではありません。課題の目的、お子さんの準備の状態、学校の指示、アクセシビリティ、使うサービスによって変わります。利用年齢に達したことは、発達上の準備が整ったことを意味しません。使えることと、使ってよいこと、今その子に向いていることは別の判断です。

## AIに最初の質問をする前に、4つのことを確かめる

4つのことを一つずつ確かめてください。一つ確認できても、残りが自動的に解決するわけではありません。

**確認1（利用の許可）**では、使おうとしているサービスとアカウントの種類を特定します。年齢条件、親の許可、対象地域、学校用か一般消費者向けかを確認します。成人がそばにいても、年齢条件やアカウントの条件はなくなりません。成人のアカウント情報をお子さんに渡すことも、成人が学習活動を進行することとは異なります。

たとえば、OpenAIの2026年8月19日付の案内では、13歳未満の子どもによる単独利用を想定せず、その年齢の教育的なやり取りは成人が行うものとしています。13〜18歳には親または保護者の同意を求めています。[34.3] 欧州経済領域、スイス、英国向けの2026年1月16日付の利用規約では、最低13歳またはその国で同意できる最低年齢という条件が示されています。利用する国でどちらの年齢条件が適用されるかは、同じ規約で確認してください。18歳未満には親または保護者の許可が必要です。アカウント情報の共有も認めていません。[34.4]

別の提供元には別の条件があります。Anthropicの2025年10月8日付の消費者向け規約は、欧州経済領域とスイスの対象利用者について最低年齢を18歳としています。この条件を他の地域、学校向けサービス、企業向けサービスへ広げることはできません。[34.5]

GoogleのGeminiでは、個人、学校、職場、保護者が管理するアカウントで利用方法が分かれます。案内の公開日を示すものではありませんが、2026年8月25日に内容を確認した時点では、保護者がFamily Linkを通じて一部の利用を有効にできる地域や端末がある一方、欧州経済領域、スイス、英国では、その監督付き経路が利用できないと案内されていました。一部機能が使えず、安全フィルターも完全ではありません。[34.6] また、同じ日に確認した別の案内では、Family Linkで管理されるアカウントは、別途説明されているウェブ版を利用できません。学校アカウントには管理者による有効化が必要で、職場アカウントには18歳以上という条件があります。[34.7] 条件は変わる可能性があります。利用前に、現在の国、端末、アカウント、機能の組み合わせを確かめてください。単一の年齢だけでは判断できません。

**確認2（プライバシー）**では、お子さんがいる場所の法令、データ処理の根拠、提供元の方針を分けて考えます。氏名、健康記録、学校の識別情報、私的な会話、顔が分かる画像、他人の未発表作品は入力しません。名前を消しただけで、必ず匿名になるとも限りません。

国ごとの差を示す一例がフランスです。フランスの法律では、本人の同意を根拠とする直接的なオンラインサービスのデータ処理について、15歳以上の未成年者は単独で同意でき、15歳未満では子どもと親権を持つ人の共同同意が必要とされています。[34.8] ただし、この規定はあらゆるAI利用を許可する年齢ではありません。フランスのデータ保護当局も、同意に基づくデータ処理、オンライン契約、子どもの成熟度と意思決定への参加を区別しています。[34.9] 案内の公開日を示すものではありませんが、2026年8月26日に内容を確認した時点では、Googleアカウントを自分で管理できるフランスでの年齢として15歳が示されていました。それでも、Geminiのすべての機能を使えるという許可にはなりません。[34.10]

**確認3（学校の決まり）**では、今回の課題でAIが許されているか、どこまで使えるか、どのように申告するかを先生や学校の指示で確かめます。学校が採用するサービスでは、学校側にも処理の法的根拠、子どもに分かる説明、提供元や国外移転の評価などが必要になる場合があります。フランスの学校向けデータ保護案内は、同意を根拠にするなら、不利益のない実質的な選択肢を用意することも求めています。[34.11]

フランスの2025年の教育枠組みでは、年齢段階に応じた学校利用を示すとともに、明示的な許可も内容の自分なりの理解もない宿題利用を不正として扱っています。公開型の生成AIサービスへ個人情報や秘密情報を入れないこと、生徒に一般消費者向けアカウントの作成を強制しないことも示しています。[34.12] これはフランスの学校制度における例であり、他の国や学校にはそれぞれの決まりがあります。

**確認4（準備）**では、お子さんが今回の課題を理解できるか、AIの限界を受け止められるか、必要なときに大人や先生へ相談できるかを見ます。読み上げ、入力方法、通信環境、使っている支援技術との相性も含まれます。使わないという本人や家族の選択も尊重します。欧州委員会の教育者向け指針も、情報を得たうえで選べること、アクセスやアクセシビリティを考えること、AIを使わない課題やオフラインの手段を用意することを検討事項に挙げています。[34.13]

4つのことを確かめて、一つでも問題があるときは、AIを使わない経路に切り替えます。本、先生、図書館の資料、電卓、音声入力、紙の例題、またはAIを使わない大人主導の活動があります。機器やインターネットがない場合だけでなく、プライバシー、アクセシビリティ、学校の決まり、家族の選択を理由に切り替えてもかまいません。

## 学びを残す5つの動き

利用できると判断したら、「試す、尋ねる、比べる、説明する、確かめる」の順で進めます。これは効果が保証された一律の指導法ではなく、AIの利用を終えたあとに何が残ったかを見るための実用的な流れです。

**試す。** まず、お子さんが自力で取り組みます。短くても、途中で止まってもかまいません。何を知っていて、どこで分からなくなったかが見えることに意味があります。

**尋ねる。** 完成した答えではなく、次の一歩に必要な範囲だけを尋ねます。「最初の手がかりを一つください」「この式のどこを見直せばよいですか」「似た例を一つ示してください」のように、助けを限定します。

**比べる。** 自分の試み、AIの出力、先生の方法や承認された資料を並べます。違いがあれば、どちらがもっともらしく見えるかではなく、根拠を確かめます。

**説明する。** お子さん自身の言葉、絵、式、身ぶり、音声など、使いやすい方法で考え方を表します。文字や記号、機器などで意思を伝える補助代替コミュニケーション（AAC）も、その選択肢の一つです。速い入力、標準的なつづり、発話、視線を合わせることを、理解を示す唯一の方法にはしません。

**確かめる。** AIの利用を終え、少し形を変えた新しい課題を自力で行います。説明できない、最初の一歩が出ない、別の例に移せない場合は、完成した答えを増やすのではなく、課題を小さな段階に分け、手がかりを一つずつ使って学び直します。

生成AIは、存在しない資料を作ったり、実在する資料を内容の合わない主張へ結びつけたりすることがあります。[34.15] 引用の形が整っていることは、根拠が確認されたことを意味しません。

重要な主張では、まず元の資料を開きます。題名、発行者、日付、対象地域を確認し、その主張を支える箇所を実際に探します。危険や権利、健康、学校での処分などに関わる場合は、必要に応じて別の適切な資料を確認したり、先生、司書、分野の専門家に確かめたりします。別の対話型のAIに同じ質問をして同じ答えが出ても、独立した確認にはなりません。

## 危険度の判定、診断、正式な配慮の決定には使わない

一般的な対話型のAIは、学習上の困難を診断したり、正式な配慮を決めたりするものではありません。繰り返し生じる困難、コミュニケーション上の必要、障害に関係する壁があるときは、本人、先生、アクセシビリティや教育の専門家など、適切な人と個別に検討します。[34.1]

出力に性的、暴力的、差別的、支配的な内容があるとき、AIが会話の内容を信頼できる人に隠すよう求めるとき、自傷、危険な行為、違法なアクセス、個人情報の共有を勧めるときは、AIの利用を中断し、課題を脇に置きます。信頼できる人に知らせます。差し迫った危険がある場合は、お子さんがいる場所の適切な子どもの保護、危機対応、または緊急の窓口へ直ちに連絡します。AIに危険度を判定させたり、その返答を待ったりしません。

## 紙だけでも続けられる学習の流れ

インターネットやAIがなくても、同じ基本の流れを保てます。紙に最初の試みを残し、本や先生から手がかりを一つ得て、承認された資料と比べ、自分の方法で説明し、新しい課題を行います。書くことが負担なら、録音、絵、カード、身ぶり、AAC、口述を使えます。必要に応じて文字を大きくしたり、取り組む時間を長くしたりできます。重要なのは、特定のサービスを使うことではなく、自分で考えた跡と、答えや手がかりを与える助けなしでどこまで理解できるかを確かめることです。AACなど、伝えたり課題に取り組んだりするために必要な手段は、その確認でも使えます。

任意の補助資料として、「家族でAIを使って学ぶ」という記入シートがあります。利用前の4つの確認と、「試す、尋ねる、比べる、説明する、確かめる」の流れを整理できます。ただし、記入シートを開かなくても、この章の手順は紙や会話だけで実行できます。危険があるときは、記入や確認を終えるのを待たず、人による支援へ切り替えてください。

記入シート：parentingstagebystage.com/ja/shiito/kazoku-de-ai-o-tsukatte-manabu/

この解説の出典：parentingstagebystage.com/ja/shutten/